

ボランティアグループへの同一性が その活動に与える影響について

— メンバーシップへの同一性とメンバーへの同一性の2側面に注目して¹⁾ —

難 波 久美子²⁾

問題と目的

2001年、国連が『ボランティア国際年』を宣言した。近年世界規模でボランティアの重要性が語られるようになってきている。国内では、『ボランティア国際年』自体は馴染みが薄いかもしい。しかし、これと連動して放映されていた AC 公共広告機構の広告、「ちょボラ」という言葉をキーワードにした広告³⁾は、聞き覚えがあるかもしれない。

もちろん日本におけるボランティア活動はつい最近に始まったわけではない。ボランティア活動は、キリスト教博愛精神に由来するものと考えられがちであるが、日本国内においては必ずしもそれだけがルーツではない。時代をさかのぼれば、日本社会にも寺院などによる地域社会作りなど、かなり古くからボランティアの原型があったといえる(村井, 2000)。だがやはり近年のボランティア活動は、1995年阪神・淡路大震災を期に大きく変化したといえよう。この年はマスコミによって「ボランティア元年」と名付けられたように、ボランティア活動が身近に再認識されるようになった年である。それまでのボランティアは、「奉仕者」と訳されることもあり、自己犠牲を前提に、人のために尽くす、一部の特別な人がす

るもの、というイメージが強かった(石田, 2000)。しかし、最近では、仲間作りやイベント重視の「楽しい」ボランティア活動に重点をおくものや、分野や地域をこえて共通の問題意識を持って交流を図るようなネットワーク型の活動(山岡, 2000)、「生きがい」としての活動(村井, 2000)も重要視されている。

しかし、ボランティア活動を集団での活動として維持していくのは、容易なことではない。1998年「特定非営利活動促進法」が成立し、NPO 組織が次々と活躍の場を広げ始めたが、形は整ったものの、実際には多くのNPO 法人が人材獲得や資金調達、組織作りなどのマネジメント面で苦しんでいる(NPOの運営学んで, 2002)。

では、なぜボランティア活動を集団での活動として維持するのが難しいのか。それは、集団として集まってくるものの、ボランティアが個人の発意から始まるもの(早瀬, 1999)であるためと考えられる。つまり、集団に所属するために集まるのではなく、たまたま個人がやりたいと思う活動がそこにありそうだから集まった、ということである。そのため、個人はその集団の維持やマネジメントにさほど注意を払う必要がない。集団が維持されなければ、やりたいことができなくなれば、他を探るか、自分で立ち上げればよいのである。また多くの場合、個人のやりたい活動をすることそのものが目的であり、利益をあげたり、組織を拡充したりすることは第1の目的ではないということも理由として考えられるだろう。このように、ボランティア活動は、個人内の要因がそのグループでの活動に大きく影響を与えると考えられる。そこで本研究では、ボランティアを行う個人が、その所属してボランティア活動を行うグループに対して、どのような同一性を持っているのか、という観点から検討したい。

ところで、Karasawa (1991) は、グループに対する同一性を2側面から説明している。その2側面とは、グループのメンバーシップやラベルに対する同一性(以下、メンバーシップへの同一性、IDg と表記する)と、グループのメンバーに対する同一性(以下、メンバーへ

1) 本稿は名古屋大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(1999年度)の一部に加筆・修正したものである。

2) 名古屋大学教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

3) 公共広告機構によると、『これまでボランティアといえば「むずかしいもの」「特別なもの」とみられがちでした。そこで「ちょボラ」。これは「ちょっとしたボランティア」のこと。たとえ1時間でもいいから、自分にもできること、関心のあることから始めてみようと呼びかけます。ボランティアを、もっと気軽に身近なものにイメージチェンジさせることが、この作品の狙いです』。(http://www.ad-c.or.jp/campaign/all/5.html より)

の同一性と表記する)である。前者は、メンバーシップへの知識と、メンバーシップに付随する価値や情緒的意義の下位側面から成っている。後者は、内集団成員への情動的な愛着や社会的影響である。

この2側面を、ボランティア活動に対応させて考えると、メンバーシップへの同一性は、その集団で何ができるのか、目的は何か、といった知識であり、それらから生じる社会的価値や満足と考えられる。また、メンバーへの同一性は、集団内に集まった他のボランティアへの愛着や、そのなかまからの社会的な影響を受けることであると考えられる。

そこで、本研究では、この社会的同一性の2側面が、個人の中で安定したものなのか、また、それぞれが活動に与える影響について検討する。まず、参加しているボランティアグループに対する社会的同一性の2側面を測定する。その後、4グループの比較により、社会的同一性とボランティアグループの活動との関連について検討する。

方法

調査対象

あるボランティア組織内で活動している4グループに所属する、18歳から25歳の大学生・短期大学生・専門学校生の男女52名(グループA 12名、グループB 14名、グループC 14名、グループD 12名、月ごとの有効ケース数はTable 1に示す)を対象とした。これらの4グループは、それぞれ独立に月1回のボランティア活動を行っている。活動内容は、幼稚園児、小学校児童を対象(グループにより対象年齢が異なる。グループA、B:小学校1, 2年生;グループC:幼稚園児;グループD:小学校高学年)とした野外活動である(以下、調査対象となった青年を調査対象者、彼らが行っているボランティア活動の対象児童を活動対象児童と表記する)。

調査時期

1999年6月から10月にかけて、定例の活動が行われない8月を除き、計4回の調査を行った。6月はボランティア活動後、7, 9, 10月はボランティア活動前に質問紙を配布し、各自持ちかえりで回答を求めた。

測度の構成

Karasawa (1991) で得られた集団のメンバーシップへの同一性 (IDg) と他のメンバーへの同一性 (IDm) という2因子を参考に、2因子 (IDg, IDm)、各3項目からなる社会的同一性測度を構成した。IDgの項目は、「○○(グループ名)のリーダーだと言われるのは気分が良い」、「○○にすることにプライドを持っている」、「○○のリーダーであることを意識している」、

の3項目である。また、IDmの項目は、「親しい友だちのほとんどは○○の人だ」、「○○には考えや行動に影響を受けた人がいる」、「○○には自分の生活にとって大切な人がいる」、の3項目である。

「全く当てはまらない」を1、「非常に良く当てはまる」を6として、自分に当てはまる程度を示す1から6の数値に○印をつけるように求めた。この数値を、各項目の項目得点として用いた。

結果と考察

メンバーシップへの同一性 (IDg) とメンバーへの同一性 (IDm) の時間経過にともなう変化について

まず始めに、想定された因子ごと(各3項目)の信頼性係数(α 係数)を求めた。その結果、6月のIDgが、 $\alpha = .80$ 、IDmが、 $\alpha = .73$ であった。以下同様に、7月、9月、10月の α 係数を求めた。7月IDg; $\alpha = .74$ 、IDm; $\alpha = .50$: 9月IDg; $\alpha = .93$ 、IDm; $\alpha = .60$: 10月IDg; $\alpha = .95$ 、IDm; $\alpha = .62$ であった。また、想定された因子に含まれる項目得点を合計し、因子得点(IDg得点、IDm得点)とした。取り得る値の範囲は、最小値3、最大値18である。各月ごとのIDg得点、IDm得点の平均、標準偏差、ケース数と α 係数をTable 1に示す。

次に、IDg得点とIDm得点の関連を検討する。各月ごとにIDg得点とIDm得点の散布図を示す(Fig. 1-1, 2, 3, 4)。

散布図より、全体の傾向として、時間の経過とともにややIDg高得点よりの左下から右上への直線に収束すると考えられる。そこで各月ごとにIDg得点とIDm得点の相関係数を求めた。6月から順に、 $r = .35(p < .05)$ 、 $r = .29(p > .10)$ 、 $r = .71(p < .01)$ 、 $r = .63(p < .01)$ であった。

Table 1 各月のIDg得点、IDm得点の平均、標準偏差、ケース数と α 係数

	平均	標準偏差 (ケース数)	α 係数
6月 IDg	15.23	2.57 (44)	.80
6月 IDm	11.41	3.47 (44)	.73
7月 IDg	14.06	2.50 (30)	.74
7月 IDm	11.20	2.80 (30)	.50
9月 IDg	13.83	3.41 (30)	.93
9月 IDm	10.37	3.41 (30)	.60
10月 IDg	13.55	3.18 (33)	.95
10月 IDm	10.70	3.03 (33)	.62

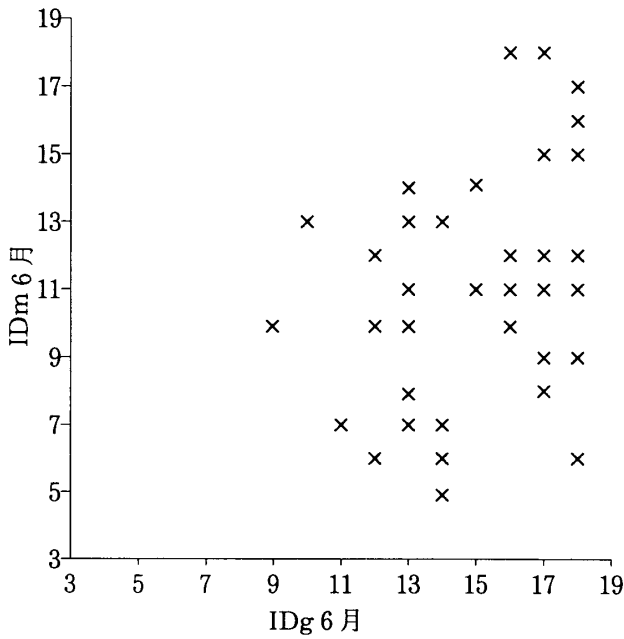


Fig. 1-1 IDg と IDm の散布図 (6月)

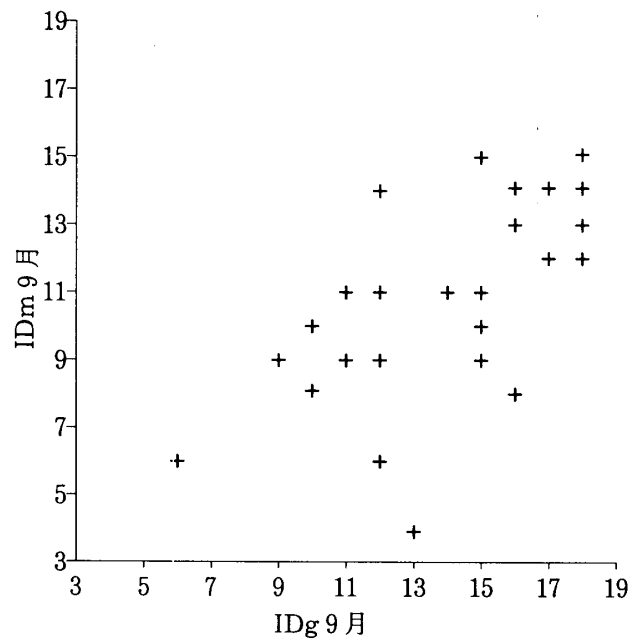


Fig. 1-3 IDg と IDm の散布図 (9月)

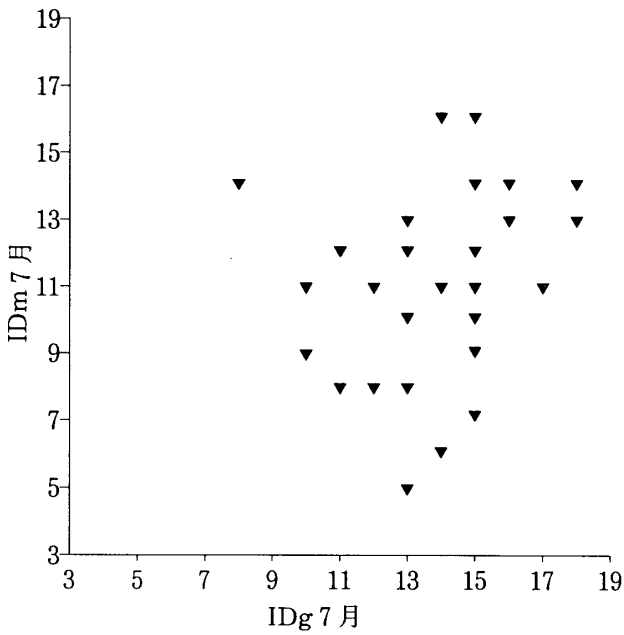


Fig. 1-2 IDg と IDm の散布図 (7月)

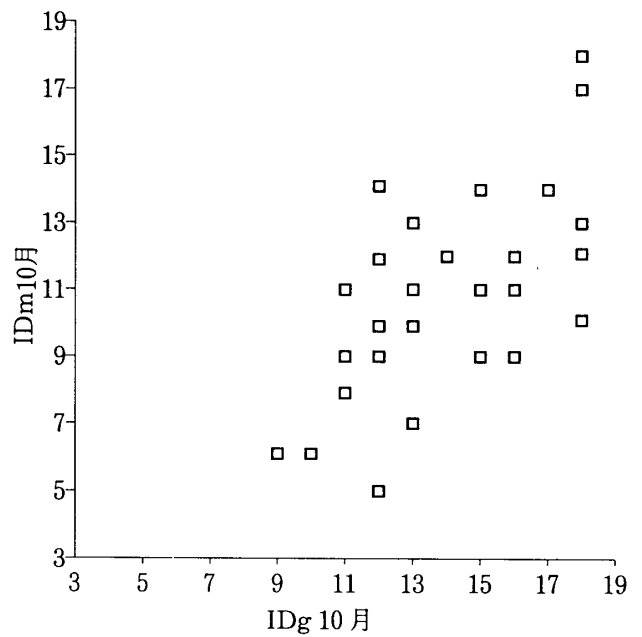


Fig. 1-4 IDg と IDm の散布図 (10月)

Table 2 メンバースHIPへの同一性とメンバーへの同一性の項目との相関係数

	6 月	7 月	9 月	10 月
生活にとって必要な人	0.38*	0.37	0.48**	0.59**
親しい人	0.25	0.09	0.55**	0.42*
影響を受けた人	0.24	0.14	0.55**	0.41*

(** p<.01 * p<.05)

IDm 測度の α 係数が下がることと、IDg 得点と IDm 得点の相関係数が上昇することをあわせると、7 月では IDm の項目で測定される意味がばらつき、9 月以降、IDm の一部が IDg の示す内容に近く解釈されているのではないかと思われた。そこで、IDg 得点と IDm の項目得点の相関係数を求めた (Table 2)。

その結果、3 項目ともが 9 月以降に有意な強い相関を示した。このことから、6 月の時点では、グループのメンバーシップ、すなわち、グループの持つ価値や意義とグループのメンバーとの関係とは独立であると捉えられる傾向が強いと考えられる。また、時間の経過とともに、グループの持つ価値や意義に、メンバーへの愛着や社会的影響といったもののうちの一部が近くなる可能性がある。

このような変化はなぜ起こるのであろうか。一つには、社会的同一性が、他者との比較によって生じるとされることにあると思われる。そこで、調査対象者の活動を検討すると、7 月は夏期休暇中の特別プログラムの準備が始まり、グループ外の人との交流が活発になる。また、9 月は、その夏のプログラムが終了し、再び所属グループに戻り、夏期の経験と所属グループを比較する機会があったことが影響したと考えられる。

また、メンバーシップへの同一性にメンバーへの同一性の意味の一部が近くなるという現象は、社会的魅力と個人的魅力によって説明できるだろう。ホッグら (1988) は、社会的同一性理論では、これまでのグループ研究では同一視されてきた集団への所属と集団内の魅力について、社会的魅力と個人的魅力を理論的に分離して説明することに成功したと述べている。社会的魅力はカテゴリー化に伴っておこる個人間の魅力である。個人的魅力は独自の信用に基づく個人間の魅力であり、個人間の密接な関係に基づいている。また、一般に関係が発展するにつれて個人的になり、結果として社会的魅力は個人的魅力に変わる、としている。このことから、メンバーシップへの同一性に、メンバーへの同一性の一部が近くなるのは、関係が発展し、社会的魅力から個人的魅力が生じてきたことを示しているとも考えられる。

そのためこの測度は、メンバーへの同一性の示す内容が一貫していない、あるいは、社会的魅力による関係と個人的魅力による関係の両方を含んでいるといえる。そこで以下では、 α 係数が比較的高いメンバーシップへの同一性を取り上げる。メンバーシップへの同一性の得点の高まることが、活動に与える影響について検討する。メンバーシップへの同一性が、活動に与える影響について

調査対象としたボランティアグループでは、月 1 回の

活動の前に、準備のミーティングを 2、3 回持つ。調査対象者がこのミーティングに参加することは、そのグループに対して社会的同一性を感じるきっかけになると考えられる。なぜなら、そのミーティングの場で活動の概要が決定されるため、その概要の中に調査対象者個人の目的が含まれそうかどうか分かるためである。個人の目的が含まれ、達成されそうであれば、そのグループに対して価値や意義を見出すことになり (メンバーシップへの同一性獲得)、その結果、その月の活動により積極的に取り組み、グループとして良い活動につながると考えられる。しかし、その活動そのものを直接評価することは難しい。そこで、間接的に活動対象児童の満足度を反映する数値を目安にする。それは、活動対象児童の翌月の活動への出席率である。すなわち「面白かった!」とその月に参加した活動対象児童が感じたなら、翌月の出席につながるためである。そこで、IDg と、IDg を調査した翌月の活動対象児童の出席率の関係を検討する。なお、出席率 (=出席者数/登録者数) は、ボランティア組織で集計している資料に基づき算出した。

各グループごとに月別 IDg の値の平均、標準偏差、有効回答数、月内順位、出席率、出席率月内順位、平均順位を示す (Table 3)。

まず、7 月と 9 月について検討する。7 月の IDg 月内順位は、翌 9 月の出席率月内順位と一致する。また、9 月の IDg 月内順位は、翌 10 月の出席率月内順位と一致する。この 2 月の IDg の順位は、次月の出席率の月内順位に影響を与える可能性があることがわかる。

次に、IDg 順位が次月の出席率に強く反映されていないように見える 6 月と 10 月について、各グループの条件差を検討する。6 月はグループ B だけが一泊二日の宿泊を伴う活動を行っており、活動条件が通常の活動と、また、他グループとも異なった。宿泊を伴う活動では、活動が 2 日間に渡ることで、宿泊であるために、活動対象児童の年齢が低い (小学校 1、2 年生) と、出席率がより下がりやすいと考えられる。6 月の出席者数が少なければ、その月の調査対象者の活動が、活動対象児童に伝わりにくいであろう。実際に同一の参加者であるかどうかまでは分からないが、6・7 月の出席者数がほぼ同数であることから、6 月の出席者数が翌月まで影響したと考えられる。6 月の IDg 順位が 3、4 位となったグループ A、D は、その値も、翌月の出席率もほとんど差はないといえる。また、10 月の順位も、同様の理由が考えられる。この月はすべてのグループが一泊二日の宿泊を伴う活動を行った。各グループとも活動条件は同じであるが、グループ C は対象が幼児であることから、初めて親元を離れる参加者が多く、参加者本人・保護者の不

Table 3 グループ別 IDg の平均, 標準偏差, 月内順位 (6月から10月) と出席率, 月内順位 (4月から11月)

有効 Idg 月内						出席率				
月	平均値	標準偏差	回答数	順位	月	出席率	月内順位	平均順位		
グループ A						4月	86%	2	1.86	
						5月	84%	3		
						6月	84%	1		
6月	14.50	2.88	12	4 →	7月	82%	2			
7月	14.60	2.95	10	1 →	9月	87%	1			
9月	13.67	2.65	9	3 →	10月	56%	3			
10月	13.78	2.39	9	1 →	11月	72%	1			
グループ B						4月	80%	3		3.29
						5月	86%	4		
						6月	74%	4		
6月	16.10	2.38	10	1 →	7月	73%	4			
7月	13.33	1.97	6	4 →	9月	69%	4			
9月	14.17	3.76	6	2 →	10月	61%	2			
10月	13.78	4.60	9	1 →	11月	8%	2			
グループ C						4月	88%	1	2.14	
						5月	95%	1		
						6月	73%	3		
6月	15.50	2.43	12	2 →	7月	82%	2			
7月	13.50	2.67	8	3 →	9月	70%	3			
9月	15.33	3.33	6	1 →	10月	73%	1			
10月	13.43	2.64	7	3 →	11月	55%	4			
グループ D						4月	82%	4		2.57
						5月	83%	2		
						6月	68%	2		
6月	14.90	2.60	10	3 →	7月	83%	1			
7月	14.57	2.23	7	2 →	9月	80%	2			
9月	12.78	4.06	9	4 →	10月	41%	4			
10月	13.13	3.04	8	4 →	11月	63%	3			

(出席率はディレクター会議資料より抜粋)

安が大きい。そのため宿泊であることの影響が強くて、出席者数は減少したと考えられる。

資料が少ないため、これだけでメンバーシップへの同一性が次月の出席率に強く関係するとは断定できない。また、出席率という間接的な指標であるため、出席者側(活動対象児童)の要因を反映しやすいといえよう。しかし、宿泊を伴う活動など、活動条件から容易に想定される出席者側の要因と並んで、活動を提供する側の、メンバーシップへの同一性がボランティア活動に影響を与える可能性が示唆されたといえよう。

今後ともボランティア活動が広がっていくと考えられる。各ボランティアの「やりたい!」という気持ちが重要であることは言を待たない。しかし、集団での活動として一定して継続させるためには、そのグループにおける活動の目的や、活動の価値・意義に対する同一性が、各ボランティアにおいて明確に保たれているかどうか、重要な点となっていこう。

今回、測度が3項目と少なかったこともあり、特にメンバーへの同一性については十分に検討ができなかった。項目の再検討も今後の課題である。

引用文献

- 早瀬 昇 1999 ボランティア団体の組織と運営 内海成治・入江幸男・水野義之(編) ボランティア学を学ぶ人のために 世界思想社 Pp.41 - 57.
- ホッグ, M.A. & アブラムス, D. 吉森護・野村泰代(訳) 1995 社会的アイデンティティ理論 新しい社会心理学体系化のための一般理論 北大路書房 (Hogg, M..A. & Abrams, D. 1988 Social identifications. A social psychology of intergroup relations and group processes.)
- Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- 村井雅清 2000 阪神・淡路大震災から生まれた「負けないぞう事業」から考察するボランティア ボランティア学研究, 1, Pp.75-85
- NPOの運営学んで 2002(9月25日) 日本経済新聞 P.9.
- 山岡義典 1999 ボランタリーな活動の歴史的背景 内海成治・入江幸男・水野義之(編) ボランティア学を学ぶ人のために 世界思想社 Pp.22 - 40. (2002年9月30日 受稿)

ABSTRACT

The effects of the group identity on volunteer activities : From the two aspects, the identification with group membership and with other group members.

Kumiko NAMBA

This study explored the relation between two aspects of group identification and their effects on volunteer activities. The two aspects of group identification were "identification with group membership (IDg)", and "identification with other group members (IDm)". Identification scales were developed, and administered to 52 students belonging to 4 volunteer groups (age 18-25) for 5 months. First, the relationship between the IDg scale and the IDm scale were examined. The results implied that IDg was stable through 5 months, but IDm was not, and IDg was related to IDm stronger in the later months than the earlier. Second, the relationship between IDg rank and the attendance rate rank was examined among the 4 groups. The attendance rate rank was calculated by the number of children who attended each volunteer activity. The results indicated that IDg ranks were consistent with the attendance rate ranks in 2 months. The other factors that determined the attendance rate ranks were discussed.

Key words: identification with group membership, identification with other group members, volunteer activity